

豊かなる縄文文化 — 三内丸山遺跡

青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室

岡田 康博

1. はじめに

縄文人は野山を駆け巡って獲物を求め、海岸で貝を拾い、森から木の実を集め自給自足の生活を送っていた。半地下式の粗末な竪穴住居に住み、ムラの人口はせいぜい20~30人程度、未開・未発達の貧しい縄文観が一般的であった。しかし最近、青森県青森市三内丸山遺跡などの発掘調査によって縄文文化の全体像が少しずつ明らかとなってきた。

三内丸山遺跡は縄文時代前期中葉から中期末葉（今から約5500年~4000年前）にかけての円筒土器文化期の巨大集落跡である。この時代にはバケツを上下に引っ張った細長い筒型の土器がたくさん作られた。これら円筒土器文化は、東北地方北部から北海道南部にかけて長い間繁栄し、その影響は遠く北陸地方や北海道西岸まで見られる。

遺跡は青森市の郊外、JR 青森駅から南西方向約3キロメートルに位置する。八甲田山系から続く緩やかな丘陵の先端、標高約20メートルの段丘上に立地している。北側を沖館川が流れる。推定される範囲は約35ヘクタールと広大で、台地全体に広がる。発掘調査はまだ全体の20パーセントしか着手しておらず、現在も集落の全体像解明のため毎年継続して行われている。

2. 遺跡の発見

三内丸山遺跡は最近発見されたわけではなく、古くから知られた遺跡である。一番古い記録は、山崎立木の「永祿日記」（館ノ越本、1623）に記載がある。世界的に著名な木造町亀ヶ岡遺跡と並んで、この地から様々な遺跡が出土したことが記されている。江戸時代後半になると有名な紀行家菅江真澄は実際にこの地を訪れ、出土した遺物を詳細に観察し、その精密なスケッチと考察を紀行文「すみかの山」（1799）に残している。このスケッチは、現在でもその遺物の年代が明確

に判別できるくらいのものである。当時メディアが発達していない時代であるから、人の噂を聞き付け足を運んだに違いない。おそらく相当量の遺物が顔を出していたことであろう。戦後も慶応大学清水潤三氏をはじめ、県や市教育委員会の手で何度も発掘調査が行なわれた。特に昭和51年には、遺跡の南側から、縄文時代中期（約4500年前）の墓が発見された。楕円形や小判形の墓が整然と南北を向き、しかも東西に2列に配置されていたのである。発見当時は、縄文社会を考える上での貴重な資料と注目されていたのである。縄文人はちゃんと墓地を持っていたのである。

そしてこの場所に新しい県営野球場が作られることになったのである。遺跡の南側にも既設の県営運動公園があり、市街地に近いこの場所が選ばれるのも止むを得ないことであった。平成4年から発掘調査は始まったのである。調査開始とともに大量の遺物や住居跡、大型建物跡などこれまで例の見ない発見が続いた。平成6年7月には直径1mのクリの巨木を使った大型掘立柱建物跡が見つかり、全国的に注目された。その年の8月青森県は遺跡の重要性を踏まえ、進めていた野球場の建設工事の中止と遺跡の永久保存を決めた。本来野球場になり姿がなくなってしまうはずの遺跡が保存されることになったのである。

現在遺跡は建物復元、遺構の展示、展示室の建設など短期整備を終え、一般公開されている。年間50万人を越える見学者があり、縄文時代を楽しんでいる。

3. 縄文人紹介

全国で出土した縄文人骨の研究から縄文人の姿が少しずつ明らかになってきている。平均身長が男性で157cm、女性はそれより10cmほど小柄で、筋肉質の体をしていて。平均寿命は約30才、女性が出産し始めるのが大体14.5才、一生の間に多くて7~8人産み、そ

のうち成人するのは4人に1人位と言われている。顔は彫りが深く、縄文美人の代表は女優の吉永小百合さんとされている。骨折やガンの事例もある。結核はない。

また縄文人は虫歯があった。これはそれ以前に比べて食生活の変化、植物質の食料を大量に摂取し始めたことを示している。鞭虫の寄生虫卵も大量に出土し、寄生虫に悩まされていたこともわかってきた。

縄文人は我々現代人の直接の祖先であり、縄文の生活の上に現代の生活がなりたっているわけである。特に東北には縄文の伝統が色濃く残っているものと考えている。

4. 3つのキイ・ワード

それではこれまでの発掘調査で判明した三内丸山遺跡の特徴について述べる。次の3つの言葉、キイ・ワードで表現できると考える。「大きい」・「長い」・「多い」である。

まず「大きい」は遺跡・集落の規模を示している。推定される遺跡の広さは約35ヘクタールと広大である。調査を進めていくとただ大きいだけでなく、集落の施設が一定の場所に整然と作られていることが明らかとなった。住居は住居、お墓はお墓と、一定の場所に空間の利用が厳密に決められていたのである。いわゆる計画的な集落づくりが行なわれていた可能性がきわめて高い。また集落を構成する施設が明らかとなったことも重要な発見であった。住居だけがあるのではなく、墓、倉庫、ゴミ捨て場、祭りをする場所、ものを作る場所などによって構成されていたのである。そしてそれらは道路によって結ばれていた。

「長い」はこの集落は少なくとも約1500年間継続したことである。これほど長期間継続した集落はこれまでに報告された例はない。1500年間と言えば古墳時代から現在までの時間の長さに相当する。非常に長い期間である。その間には豊かな時代もあれば非常にきびしい時代もあったはずである。さらに日々様々な問題があったことだろう。にもかかわらずこの地に居住していた。当時の平均寿命は約30才、頻繁に世代交替を繰り返しながらも、この集落で大部分の人間は一生を終えたのである。だからこの土地に対する感情、執着、習慣、あるいは風土といったものが間違いなく形成されていた。現在までに形として残らない精神文化が築

き上げられたことを忘れてはならない。そしてそれは確実に現代に生きる我々の中に引き継がれているのである。そんな気持ちで遺跡を見ればまた違った思いが湧き上がるはずだ。

「多い」はこの遺跡は膨大な情報量を持っているということだ。例えば出土遺物。これまでに約4万箱もの遺物が3年間の調査で出土した。青森県だと年間に800箱~1000箱が平均である。40年分が一気に出土したことになる。しかも全てではない。遺跡保存が決定してからは本格的に遺物を取り上げてはいない。現地にはこの何十倍もの遺物がまだ埋蔵されているのである。たいていの遺跡は土器・石器が大部分であるが、三内丸山遺跡はそれだけではない。本来は長い間土中であって分解し、残らないはずの情報がここでは非常に良好な状態で出土する。約5500年前の樹木とか、それらの種実、葉とかが大量に埋もれている。さらにヤマブドウ・サルナシ・ヤマゲワ・キイチゴなどの小さな種実なども同様だ。肉眼では見ることのできないミクロの情報も貴重だ。花粉・寄生虫卵、はては植物の遺伝子も残っている。これらを現代科学の最先端の技術で分析・解明すると、これまで推定の域を出なかった縄文人の生活・環境・気候などが具体的にわかってくる。しかも詳細なデータを示すことが可能なのである。土器・石器などの考古遺物は遺跡のほんの一部の情報にしか過ぎないのである。我々はこれまで豊富な情報を自ら廃棄してきたことを素直に反省する必要があると思う。今年度は縄文人が自然に対してどのような働き掛けを行なったのか、それを遺伝子レベルの分析を行い、明らかにしたいと思う。

三内丸山遺跡の特徴は「大きい」・「長い」・「多い」という言葉で表現するのが現在のところ最も適切と考えられる。本来であれば「巨大性」とか「継続性」とかと表現するのが良いのかもしれないが、子供でも言える、使えるような言葉でなければならないと思い、あえて使っている。なぜなら遺跡には目を輝かした子供達がたくさん訪れるのだから。

5. 数々の発見

これまでの数々の発見の中で縄文時代のイメージを変えるようなことを紹介してみたい。

まずはこの遺跡が話題になる大きなきっかけを作った例の直径1mのクリの巨木を使用した大型の掘立柱

建物である。これについては建物説と非建物説がある。建物説は規則正しく4.2m間隔で6本の長方形に配置され、柱が堅固に固定されていることから、大型の相当の高さのある、高床建物を想定している。非建物説は諏訪の御柱に代表されるような民俗例を根拠とし、聖なる空間、あるいはカナダ北西海岸に見られるトーテムポールをイメージしている。確かに地下に残された断片的な情報で、約4500年前の地上の構築物を推定するのだから絶対に正しいとは言えないかも知れない。しかしその断片を詳細に分析することによって具体的な仮説は持つことができるのである。柱穴が等間隔で配置され、柱は柱穴のそれぞれ外側に接するように設置され、さらに柱がお互いに若干内側に傾いていることなどからやはり上屋構造のある建物と考えるのが妥当である。しかし、高さについては議論の分かれるところである。そこで我々は柱穴の柱と接している部分の土壌が大きく変色しているのに着目し、荷重による変質ではないかと考え、専門家に分析を依頼した。その結果、1㎡当たり20tの荷重がかつてかかっていたことが判明し、もし直径1mの柱が単独で自立していたとすれば、最大で約23mの高さを想定できるとのことであった。ところが30mもの真っすぐなクリの木は現存しない。一般にクリの木は枝分かれし易く、真っすぐには伸びないとされる。当初は現存するクリの木はせいぜい7～8mだから、そのあたりが最大値と考えられていた。しかし市民の方から真っすぐなクリの木の存在が通知され、実際に調査したところ15mを越えるクリの巨木が確認され、現在のところその高さは15～20mの間位の上屋構造のある建物と推定されている。ある大学の先生が「クレーンのない時代にそのような巨大建築物が建てられるわけがない。」と発言されたが、御柱でもトーテムポールでも立てる際には人力のみで機械などは必要としないことを御存じなのであろうか。

しかしこの建物の機能・用途は現在のところ明確ではない。物見やぐら、灯台、魚の見張台、神殿などの諸説があるが、やはり集落全体の中で明らかにすべきである。しかし全国の遺跡を見ても、数多く発見された大型掘立柱建物跡でこれほどまでに巨大なものはない。やはり何か特別な施設、「祭祀」に関する施設とするのが妥当な考えなのかも知れない。

この大型掘立柱建物跡以外にも大型の住居や盛土な

ど、大勢の人間が共同作業によって作り出した遺構が発見されている。大型住居は長さが約32m、床面積が250㎡程の広さがある。普通の住居の50倍以上の広さがある。単純に見れば大勢の人々が生活できる広さであり、当然それだけの人々がいた証拠である。必ず大型住居はいつの時代も立っており、集落の中心から見つかる傾向がある。集会所、冬期の共同住宅、共同作業所、有力者の家、若者宿などの見解があるが、決定的な証拠はない。そしてこれらの大型の建物はある一定の長さ＝約35cmを単位として作られているのである。類ものさしとか縄文尺とかと呼ばれている。縄文時代にも長さの単位があった可能性が高い。この単位は一般の住居には適用されない。大型の建物だけに用いられているのである。これはやはり共同作業によるためのものか、あるいは大型建物を建てる専門家がいたことを示唆するものである。情報を共有することにより、成し遂げられるものであると考えられ、長さの単位があることで作業はより円滑に進んだであろうことは容易に想像できる。いずれにせよ、このような大型建物を造るということは、それが可能であった人・技術・組織があったことを示唆している。そしてその建設は集落にとって一大イベントであったはずだ。大勢の人間が集まり、共同で行なわれたに違いない。その意味では御柱の祭りやトーテムポールにみられるような情景と共通するものがあるのかもしれない。

6. 豊かな食生活

三内丸山遺跡からは当時の食生活を物語る動物や魚の骨、植物の種子が大量に見つかっている。動物では一般の縄文遺跡に見られるようなシカ・イノシシが少なく、ノウサギ・ムササビなどの小動物が多い。動物の骨を長年研究している国立歴史民俗博物館の西本豊弘さんは、動物食料だけではこの巨大集落を支えるのは無理だと言う。魚類も豊富であるが、動物を捕うことができたか検討する必要があると言う。魚類は暖流系と寒流系が混在しており、外洋の表層を回遊する魚が多い。三内丸山遺跡の縄文人は陸奥湾内にとどまらず、津軽海峡まで出掛け、漁撈をしていたのである。マダイ、ヒラメ、ブリ、マグロ、アジ、サバ、イワシなど種類は豊富だ。動物・魚だけでは心もとないとすると、植物性食料を重視しなければならない。最近の縄文人骨の科学的な分析では、縄文人の食生活の大半

は植物質のものであったとの結果が出されている。

遺跡の低地の部分は泥炭層になっており保存状態の良い植物種子が大量に出土する。我々は土壌を全量回収し、フルイにかけながら水洗を行い、残留物を顕微鏡で調査するというを行なった。そうすると微細な種子がたくさん発見されたのである。ヤマブドウ・サルナシ・キイチゴ・ヤマグワ・ニワトコ・クリ・クルミに混じって、その中から人間が手を加えなければ育たない栽培植物の種が見つかったのである。ヒョウタン・ゴボウ・エゴマ・マメ・アカザなどである。縄文人は栽培する技術をすでに知っていたのだ。狩猟・採集だけではなく、自ら食料を生産していたわけである。また宮崎大学の藤原宏志先生により5500年前の土壌と土器の中からイネ科イヌビエのプラント・オパールが発見されている。さらに炭化した種子そのものも見つかっている。縄文人は集落近くに生えた野性の穀類も食料として利用していた可能性が出てきたわけである。なおヒエは日本で野性から栽培種へと変化したと言われており、実際に六ヶ所村富ノ沢遺跡からは縄文時代中期の栽培ビエが発見されている。また、静岡大学の佐藤洋一郎さんは出土したクリの実の遺伝子分析を行い、すでにクリが栽培されていたことを明らかにした。集落の周りにはクリ林が広がっていたのである。縄文人は自然に依存しながらもかなり積極的な働き掛けを行っていたのである。

それらの食材はさまざまに調理されて縄文人の腹を満たした。縄文時代の最もポピュラーな調理は、土器を使った煮込むことである。そうすることによって、アク抜きされたり、固いものが柔らかくなったり、食材の利用範囲が広がった。時には木の実と動物の肉、鳥の卵を混ぜ合わせたハンバーグやクッキーのようなものも作られていた。当然食料の保存加工や貯蔵も行われていた。

7. 遠方との交易

三内丸山遺跡からは遠く離れた地方から持ち込まれたものが出土している。新潟県糸魚川のヒスイ、岩手県久慈地方のコハク、北海道や長野県の黒曜石、秋田県のアスファルトなどである。特にヒスイは原産地以外では東北地方北部から北海道南部にかけて数多く分布している。同心円的な分布をしないのである。それは日本海を直接越えて運ばれたことを示している。舟

を操り海流に乗り、一気に三内丸山に運び込まれたのである。三内丸山遺跡からは原石、未完成品、完成品が出土していることから、この地で加工され、さらに周辺の集落に再分配されたと考えられる。入ってきたものがある以上、出ていったものがあるに違いない。それはもう形として残っていない、食品とか毛皮かもしれないし、土器作りの盛んであったこの集落の土器作りの情報が伝わったことも考えられるのである。事実能登半島の遺跡からは三内丸山遺跡に代表される円筒土器と良く似た土器が出土している。こちらから持っていたものではなく、こちらの情報をもとに作られた土器だ。縄文人は他の地域と交易を活発に行っていたのだ。

8. 階層社会か

道路を挟んで2列に整然と総延長420mも続く墓地が作られているながら、そこ以外からも人骨が出土している。ひょっとすると集落の人々全員が墓地に埋葬されたとは限らないのではと考えられる。つまりなんらかの社会的位置の違いがあったのではないか。階層社会ではなかったかということである。一般に狩猟・採集社会は平等社会であると言われ、縄文社会もそうだとされてきた。しかしそれは大きな間違いである。よく縄文文化のモデルと言われるカナダ北西海岸インディアンの人々は階層社会である。狩猟・採集文化にも現実に階層社会は存在しているのである。当然争いも起こる。平等な縄文社会に戦争がなかったとの説があるが、それには弥生時代と比較してとの注釈が必要だ。あるいはせめて縄文時代にはなかったという願いが強いのかかもしれない。三内丸山の社会を考えると、階層社会を念頭に置く必要がありそうだ。またこどもの墓と大人の墓の区別は縄文人の死生観が表現されていると考えられる。縄文人の心を考えると理解できる現象がたくさんあるかもしれない。土器を作った人、使った人、棄てた人の心を考えることも遺跡を理解する上では重要である。

9. まとめ

これらの調査成果を見ると、三内丸山遺跡は今から約5500年～4000年前の約1500年間継続した、円筒土器文化の定住型の拠点の大集落であると理解できよう。そしてそれを支えたのは青い海と青い森であった。豊

かな資源を有効に利用していたのである。一万年間続いた縄文文化は停滞していたのではなく、自然と人間との共生がバランス良く保たれていたからなのである。当然それを支えた縄文人の思想があり、今日再び求められているのかも知れない。

三内丸山遺跡は現在、建物復元や展示室の整備が行なわれている。そして大事なことは、「縄文時代に遊ぶ・楽しむ」ことである。誰もが楽しめ、縄文人のメッセージを受け取ることができたらと思う。しかし、その基本となるのはきちんとした学術的調査が行なわれ、

評価を受けることである。それなくして遺跡の整備・活用はあり得ない。我々の仕事は遺跡から発信される情報を、より早く、わかりやすく、しかもちょっとだけ質が高く、知的好奇心をくすぐるようなものを提供することであると強く感じた三内丸山遺跡の調査であった。常に市民の近くである遺跡でなければならないのである。

発掘調査はいろいろな課題を解決する以上に多くの謎を提供してくれる。遺跡にはそんな謎がまだまだたくさん埋まっている。